

佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24) 3947

N.87



涅槃変相図 善定寺

目 次

- | | |
|------------------------|-------|
| ○涅槃変相図 | 表紙 |
| ○資料紹介「涅槃変相図」 | 2~4 P |
| ○講座要旨「佐賀県の自然と蝶類」 | 5~7 P |
| ○行事のおしらせ | 8 P |

涅槃変相図

(法量と現状)

絹本着色 掛幅装(描き表装) 画絵は三幅一舖。
 総 堪 328.0 cm 総 横 237.5 cm
 本地堪 233.8 cm 本地横 230.9 cm
 絹幅左 79.5 cm 絹幅中 82.1 cm
 絹幅右 75.8 cm

総体的に保存は良好で、汚損や横折、顔料の剥落はほとんどない。ただし小規模ながら数箇所に補綴と補筆が認められる。補綴は、涅槃場面の釈迦の胸を背き上は湧雲、下は宝床にかかる棒状の部分、中央下の獅子の頭から胸の辺り、中央上端の虚空に昇った釈迦の光背に一部かかる辺り、本地左右両下隅が主な箇所である。補筆は、涅槃場面の釈迦の胸にかかる棒状の部分、虚空に昇った釈迦の光背の各補綴箇所および表装右隅の部分などの箇所である。本地左右両下隅の補綴箇所に描かれていた会衆の動物が失われているほかは、いずれにしても全体の図象には影響のない程度のものである。

以上のように本図は、色彩、図像とともに制作当初の状態よりほとんど変わりない美しい姿を保っている。

(場面配置と図像)

本図に描かれるのは、画面中央の「涅槃の場面」を取り囲むように画面の左下から、「香姓婆羅門が舍利を分かつ場面(分舍利)」、「涅槃に遅れて来た弟子迦葉のために、釈迦が棺より足を出すところと茶毘の場面」、「釈迦が純陀の供養を受ける場面(最後の供養)」、「涅槃直前の釈迦が虚空に昇りその姿を大衆に示す場面(最後の説法)」、「母摩耶夫人のために涅槃直後の釈迦が棺より起きあがり説法する場面(再生説法)」、「釈迦をおさめた棺が拘尸那城をめぐる場面」、「力士が釈迦をおさめた棺を擧げようとするが動かない場面」の八場面で、中央上方には涅槃に飛来する摩那夫人の一行を描く。

本図と同じ場面配置をとる涅槃図としては朝鮮半島から将来された長崎県平戸市最教寺のものが良く知られているが、本図は、左側面をみせる宝床に手枕して右脇を下にして横臥する涅槃場面の釈迦や婆羅双樹の配置また他の会衆の形姿など図象においても最教寺本とほとんど変わることはない。ただし、象と獅子の位置が左右逆になるなど動物の配置や種類などに若干異なる点をみていく。

このような場面配置や図像を特徴とする涅槃図は朝鮮半島において高麗時代に制作され、最教寺本のような将来作品を祖本として日本においても類例が制作されたと考えられている(註1)。



図1 涅槃変相図 部分 善定寺

(表 現)

伸びやかで力強い筆使いや端麗な彩色は稚拙さを全く感じさせない。上向きの顔や様々な姿態をみせる会衆(図2)を巧みに描く形態把握の的確さ、無駄の無い衣褶線、こまやかな毛描きと量どりによるゆたかな肉質の表現、さらには暢達な描線をも加えて表現される悲喜に満ちた会衆の表情には作者の洗練された感覚とそれを受け止めるだけの熟練した画技が認められる。

表現についても、場面配置や図像と同じく本図と最教寺本との近似が指摘される。それが最も明瞭に看取できるのは釈迦の頭部と湧雲の表現である(図3)。最教寺本の釈迦の頭部の表現については高麗時代末期の仏像との共通点が指摘されており(註2)尖った頭頂部と横に張った髪部がその特徴となっているが、本図についても同様の特徴が指摘でき図像と同様に朝鮮系の祖本に対する忠実な姿勢がうかがえる。本図の湧雲はまず朱や群青を薄く塗り、白色顔料で暁取りし、さらに薄く白色顔料を上塗りして、最教寺本の鮮やかな色彩による湧雲の表現と同じ効果を出しているが、最教寺本にくらべ色彩は淡く明度が高い。湧雲に限らず全体をみてよどみのない暢達な描線を生かした淡い彩色がなされている。最教寺本にはない明朗で清雅な印象を受けるのはそのためであろう。また大和絵的で流麗な水波の表現には、概念的な最教寺本の水波に比べると明らかに和様化があることがみえる。

以上のように本図には朝鮮系の祖本の図像と様式に対する正確な理解がみられ、それを長年に渡って形成された伝統美的の繼承とするならば、肥瘦のある描線と淡い彩色によって具体化されている清新な画風は、画家による変奏、その創造性の発露といえるだろう。



図2 涅槃変相図 部分 善定寺



図3 涅槃変相図 部分 善定寺

(伝 来)

本図は現在、佐賀市精町の善定寺に所蔵されており、2月15日の釈迦入滅の日を前後して本堂に掛けられて公開されている。しかし表装中廻し(天)の部分には墨に縁取られた金泥で「寺岳三 山王醫」と篆体で記されており、また裏面の軸木部分には、絹が欠損して一部の文字が不明であるものの次のようないき墨書銘がある。

「 肥前小城郡醫王山三岳口
涅槃尊像壹幅
□貽明曆第□□戌年□□存置焉 」

福田橘左衛門藤原清信敬畫之

」

以上のことから、本図は佐賀県小城の三岳寺の什物として「明曆第□□戌年」つまり明曆四年(1658年)に制作されたことが知られる。

醫王山三岳寺は、佐賀藩主鍋島直茂・勝茂を檀那とし、閑室元信によって開かれた臨濟宗南禅寺派の寺院であり、塔頭は廣徳院、清淨院など数箇所、田畠屋敷は十四町五段ほど、地米は百二十石ほどを有していたことが知られる(註3)。

開山の閑室元信は小城郡晴気の生まれで、関東を遍歴中に徳川家康に認められて、足利学校、南禅寺

の住職を歴任した。また家康から木版を賜り、孔子家語、貞觀政要、武經七書を出版するなど文武両道にあかるく、家康の參謀として重用され、さらに家康は元信を開山として京都円光寺、駿府円光寺を建立している(註4)。このように元信と家康の関係は相當に密接であったため、関ヶ原の戦に鍋島氏は西軍についたにもかかわらず元信のとりなしにより安泰であった。このことが契機となり、元信の恩と徳に報いるために鍋島直茂・勝茂父子は、その生地の小城に三岳寺を建て、開山として元信を迎えた。

ところで本図が描かれた前年、明暦3年3月4日には三岳寺の燈那である佐賀初代藩主鍋島勝茂が没しており(註5)、墓所は高伝寺にあるものの、三岳寺にもその位牌を安置して施餓鬼などの供養をおこなっていたようである(註6)。前述のような三岳寺と鍋島本家とくに勝茂との関係を考えれば、本図制作の動機を勝茂一周忌法要に求めることも可能である。この壯麗な巨幅に十分に見合った動機であろう。

本図の筆者については墨書鉢から「福田橋左衛門藤原清信」とわかるが、この画家については「西肥遺芳」などの佐賀の画史、画伝にはその名が載らず作品も知られていない。ただし「藤原清信」とのみ限ってみると「古画備考」には、狩野長信の子として狩野清信をあげており(註7)、その活躍の時期も本図が描かれた明暦を前後しており興味深いが、狩野氏が福田橋左衛門と名ることは不自然であり、また狩野清信の作品としては「金毘羅図」(註8)「龍國」(註9)などが知られるのみで本図とは画題の違いから画風の比較は容易ではなく、「福田橋左衛門藤原清信」すなわち狩野清信とするには否定的材料が多く無理である。残念ながら現時点では筆者については本図以外の資料は見出することはできない。

さて、鹿島の普明寺にも同図像の涅槃変相図が伝来している(註10)。普明寺は鹿島鍋島家の菩提寺で宗派は黄檗宗である。銘文から普明寺本の制作年は元禄五年(1692)。筆者は永松玄健と知ることができるが、玄健については、その画歴、作品とともに多くは知られていないものの、佐賀藩二代藩主光茂夫人に請われて「与賀神社縁起図」(註11)を描いており、その子秀精は佐賀藩に召し抱えられるなど(註12)、鍋島氏との関係は浅からぬものであったことが想像される。

ともに朝鮮系の図像を継承し鍋島氏との関係が考えられる普明寺本と本図の存在には、朝鮮半島と近く最教寺本のような将来作品を眼にすることの比較的多かった地理的条件だけではなく、文録・慶長の

役に際して朝鮮半島に渡り、直接にその風土と文化に接した直茂・勝茂など鍋島氏の半島文化への関心とその美意識がうかがえるのではないだろうか。

註

- 1 菊竹淳一「高麗時代の涅槃変相図—香川・常德寺本を中心に—」大和文華第80号 1988年9月
- 2 菊竹淳一「涅槃図像の変遷—中央アジアから日本へ—」『涅槃会の研究』 元興寺文化財研究所 1979年
- 3 「佐賀県史料集成 古文書編14」 三岳寺文書
73 三岳寺領本帳写
『佐賀県史料集成 古文書編14』 三岳寺文書
74 三岳寺領田畠屋敷等書上
- 4 「佐賀県史料集成 古文書編14」 三岳寺文書
70 雪岩三岳寺由緒書
『佐賀県史料集成 古文書編14』 三岳寺文書
72 三岳寺由緒略記
- 5 鍋島家系図(佐賀県立図書館 鍋島文庫)
- 6 「佐賀県史料集成 古文書編14」 三岳寺文書
70 雪岩三岳寺由緒書
- 7 朝岡興植著 大田謹増訂「増訂古画備考」39 狩野譜(思文閣 1970年8月)
- 8 「洛中洛外」(日本屏風絵集成 第11巻 風俗画 講談社 1978年1月) 図版98、99
- 9 「狩野派大観」(1912年) 第35図「維摩龍虎図」三幅対のうちの一幅
- 10 紙本着色 掛幅装(描き表装) 堪八列、横三列に24紙を継ぐ。
縦454.4cm 縦横384.3cm (現状)
銘文(画面左下)
(朱印三顆) (朱印二顆)
「肥前國永松玄健齊藤原長則拝圖焉
元禄五年申歲正月二十
五日功成 彩色
永松傳九郎則清 (朱印一顆)
岸與兵衛
吉鶴平六 」
- 11 「肥前の近世絵画」(佐賀県立博物館 1977年) 図版21
- 12 狩野雄一編「西肥遺芳」(西肥日報株式会社 1917年4月) 9頁

(学芸員 竹下正博)

佐賀県の自然と蝶類

佐賀県は九州の北西部に位置し、北東部は福岡県西部は長崎県に隣接する。北は対馬暖流が北上する玄界灘に面し、南は日本一の干満の差で有名な有明海が広がり平地から丘陵地が多く、山地は長崎県境の銘ヶ岳(1075.5m)を主峰とする多良山地、福岡県境の背振山(1055.2m)を主峰とする背振山系及び中央部の天山(1046.2m)を主峰とする山地があるがほとんどの700~500m程度の低山地である。年平均気温14~16°C、年平均降水量は2000~2500mmとかなり多く、植生は海岸から丘陵~低山地はシイ・カシなどの常緑広葉樹が交じった二次林で、上部には落葉広葉樹の二次林が存在する。しかし、丘陵地から山地の大部分はスギ・ヒノキを主体とした植林地で、ブナクラス域自然林は多良山地・背振山系の800m以上の高所にわずかに存在するにすぎない。また、玄界灘沿岸部や島嶼部には対馬暖流の影響を受けてタブ林が残存する。草原は大野原・基山・天山・波戸岬などに二次草原としてわずかに存在するにすぎない。

佐賀県の蝶類相に関しては戦後、秋山利夫や県下高校の生物部によって県内各地の調査が行われ、現在では県下高校の生物部や佐賀昆虫同好会員により分布や生態の調査研究が進められ、その成果は研究物として各種の印刷物で多数発表されており、本県での分布の概要が判明したと思われる。地理的条件地形・気象・植生などの影響で、佐賀県には特産種や高山性の種は生息しないが、南方からの迷蝶や偶産種と考えられる蝶の記録も多くあり、98種（迷蝶や偶産種を含めて）が記録されている。今回は紙数に制限があり土曜教室講座より、佐賀県土着種についてのみ要旨を記した。

1. セセリチョウ科

この科の蝶は、ミヤマセセリ・ダイミヨウセセリ・アオバセセリ・コチャバネセセリ・ヒメキマダラセセリ・キマダラセセリ・ホソバセセリ・オオチャバネセセリ・ミヤマチャバネセセリ・チャバネセセリ・イチモンジセセリ・クロセセリの12種が記録されている。

ダイミヨウセセリ・コチャバネセセリ・キマダラセセリ・ホソバセセリ・チャバネセセリ・イチモンジセセリ・クロセセリは県下各地の平地から低山地に不变的に分布していると思われる。ミヤマセセリ

とアオバセセリは前記と同様と思われるが、平地での採集例は少なく低山地から山地に分布し個体数は少ない。特異的な分布型を示すものとして、ヒメキマダラセセリは山地性で背振山系・天山山地を中心におオチャバネセセリ・ミヤマチャバネセセリは平地から山地までの記録があるが背振山系に多く県下では局所的に分布する。

2. アゲハチョウ科

この科の蝶は、ジャコウアゲハ・オスジアゲハ・ミカドアゲハ・キアゲハ・アゲハ・モンキアゲハ・クロアゲハ・オナガアゲハ・ナガサキアゲハ・カラスアゲハ・ミヤマカラスアゲハの11種が記録されている。

ジャコウアゲハ・オスジアゲハ・キアゲハ・アゲハ・モンキアゲハ・クロアゲハ・ナガサキアゲハは県下各地の平地から山地にきわめて普通に産する。オナガアゲハの分布は局所的で背振山系・多良山地・天山山地で普通に産し山地性を示し、成虫は低山地から山地の沢沿いや樹林周辺を弱々として飛翔している。カラスアゲハ・ミヤマカラスアゲハは山地性を示し県下の山地で採集されているが個体数は少ない。ミカドアゲハは昭43年頃より採集されだし、鳥栖市・佐賀市・唐津市・佐賀郡・東松浦郡・小城郡・杵島郡などの県東部・中部・北部の市町村で採集されているが個体数は多くはない。県南西部での記録はみあたらない。幼虫は庭園木として植栽されるオガタマノキやダイサンボクを食するので人為的に移入する可能性も強くこれから調査が必要である。「高知市のミカドアゲハおよび生息地」は国指定の特別天然記念物である。

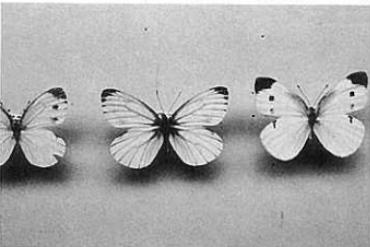
3. シロチョウ科

この科の蝶は、モンキチョウ・ツマグロキチョウ・キチョウ・エゾシジグロシロチョウ・スジグロシロチョウ・モンシロチョウ・ツマキチョウの7種が記録されている。

エゾシジグロシロチョウは県下では特異な分布を示し、基山町基山付近及び玄界灘の島嶼の向島・馬渡島・加唐島で生息が確認され生息地では個体数も少くない。♂♀及び季節による斑紋の相違ならびに地理的変移が頗著で近似種のスジグロシロチョウとまぎらわしいので図鑑などで同定では十分に気をつけなければならない。他の種類は県下各地に広く分布しているが、ツマキチョウは近年減少しており個体数も少ない。

春になるとサクラの開花日が報じられ、サクラ前線の上陸あるいは北上という報道がなされるが、勤

物においてもウグイスやヒバリの初鳴日、ツバメの初見日など生物季節が報じられる。昆虫類の代表としてモンシロチョウがある。この蝶が選ばれたのは早春に羽化出現しかわいい姿を現す、日本全土に普遍に分布し個体数が多い、畑や人家の近くに生息し一般によく知られた蝶であるからと思われる。ヒガンザクラの開花前線の九州上陸は2月下旬に始まり気温の上昇とともに北上し、北海道の北端に達するのは5月中旬になるという。モンシロチョウもヒガンザクラの開花前線に合わせるように出現する。佐賀県での初見日は最も早い日で2月6日(1989)の記録があるが一般的には2月中旬である。生息環境は平地から丘陵地の畑や人家の周辺で日当たりの良い路傍や耕作地で、近似種のスジグロシロチョウは丘陵地や低山地の樹林縁や路傍で住み分けをしている。



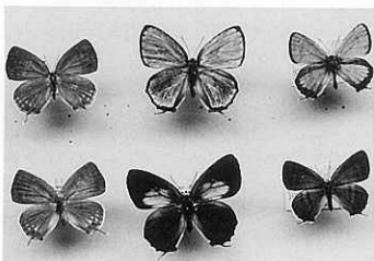
(左より) エゾスジグロシロチョウ スジグロチョウ モンシロチョウ

4. シジミチョウ科

この科の蝶は、ムラサキシジミ・ムラサキツバメ・ウラキンシジミ・アカシジミ・ミズイロオナガシジミ・キリシマミドリシジミ・フジミドリシジミ・トラフシジミ・コツバメ・ベニシジミ・ゴイシシジミ・クロシジミ・ウラナミシジミ・ヤマトシジミ・シルビアシジミ・サツマシジミ・タッパンルリシジミ・ルリシジミ・スギタニルリシジミ・ツバメシジミ・タイワンツバメシジミ・クロツバメシジミ・ウラギンシジミの23種が記録されているが県下各地にきわめて普通な種から産地が分散されるものや産地が極限されてきわめて稀な種まで分布は多岐にわたっている。

県下各地に広く分布する種はムラサキシジミ・ムラサキツバメ・ベニシジミ・ウラナミシジミ・ヤマトシジミ・サツマシジミ・ルリシジミ・ツバメシジミ・ウラギンシジミの9種である。トラフシジミは唐津市・伊万里市・三養基郡・杵島郡、コツバメは多久市・唐津市・伊万里市・佐賀郡・杵島郡、ゴイ

シシジミは鹿島市・藤津郡・西松浦郡での記録が無く十分な調査が必要と思われる。分布が局所的な種としてアカシジミは背振山系・天山山地、ミズイロオナガシジミは背振山系・天山山地・多良山地の丘陵地から山地のクヌギやカシワ林周辺に、キリシマミドリシジミは背振山系・天山山地・多良山地の高標高地を中心に、クロシジミは背振山系・天山山地・唐津市などの平地から山地まで記録されているが背振山系が中心で、タイワンツバメシジミは玄界灘や伊万里湾沿岸部の市町村などで採集されているが個体数は少ない。産地が極限される種類には、ウラキンシジミが太良町中山で数頭、フジミドリシジミが島栖市の背振山系石谷山から九千部山のブナ林で少數、シルビアシジミが玄界灘の島嶼のうち小川島・加部島・神集島・高島とその対岸の唐津市や東松浦郡の海岸沿いの草地に多く基山町基山などで数例が記録され、タッパンルリシジミが天山山頂と背振山で各々1♂、スギタニルリシジミが基山町基山及び多良山地で採集されるが基山では1例で他は多良山地の鹿島市・太良町・嬉野町で個体数も少なからず採集されており、クロツバメシジミが玄界灘の島嶼のうち向島・馬渡島・松島・加唐島・小川島・加部島・神集島とその対岸の唐津市や東松浦郡の海岸沿いの草地から知られている。



(左より) フジミドリシジミ キリシマミドリシジミ ミズイロオナガシジミ

5. テングチョウ科

この科の蝶は日本ではテングチョウ1種のみを産し、県下での記録は分散的で確実な記録がない市町村もあるが、記録されている地域では平地から山地まで個体数も少なからず採集されており、近年では平地などでも非常に目立つようになったので未記録地での採集もなされると思われる。

6. マダラチョウ科

この科の蝶は九州本土以北ではアサギマダラ1種

を産するが県下各地の丘陵地から山地に比較的多く生息し樹林周辺をゆるやかに滑空したり各種の花で吸蜜しているが、1度取り逃がすと空高く舞い上がり逃げ去る。

7. タテハチョウ科

この科の蝶は、ウラギンスジヒョウモン・オオウラギンスジヒョウモン・メスグロヒョウモン・クモガタヒョウモン・ミドリヒョウモン・ウラギンヒョウモン・オオウラギンヒョウモン・ツマグロヒョウモン・イチモンジチョウ・コミスジ・サカハチチョウ・キタテハ・ヒオドシチョウ・ルリタテハ・ヒメアカタテハ・アカタテハ・イシガケチョウ・スミナガシ・コムラサキ・ゴマダラチョウの20種が記録されているが県下各地にきわめて普通な種から产地が分散されるものや产地が極限されきわめて稀な種まで分布は多岐にわたっている。

コミスジ・キタテハ・ルリタテハ・ヒメアカタテハ・アカタテハ・コムラサキ・ゴマダラチョウは県下各地の平地から山地まで広く分布するが、コムラサキやゴマダラチョウが近年平地（特に農村地域）では減少し少なくなっている。イチモンジチョウ・サカハチチョウ・ヒオドシチョウは県下各地の丘陵地から山地に広く分布するが個体数は少くない。イシガケチョウは從来山地性で個体数の少ない種であったが近年は分布地域を広げているよう平地や市街地まで見られるようになった。スミナガシは県下各地の丘陵地から山地に広く分布していると思われるが未記録の市町村もあり、個体数も少ない。ヒョウモンチョウ類では、ツマグロヒョウモンが県下各地の平地から山地に広く分布し普通に見られ、ミドリヒョウモンが県下各地の丘陵地から山地にかけて日当たりのよい樹林周辺に広く分布し個体数も少なからず生息し、メスグロヒョウモンは県東部や中部の一部の市町村で未記録であるが、県下各地の丘陵地から山地の日当たりのよい樹林周辺で採集される。草原性では、ウラギンスジヒョウモン・ウラギンヒョウモンが県下各地の平地・丘陵地・低山地などの日当たりのよい明るい草原や堤防草地に生息するが個体数は少なく、オオウチギンスジヒョウモンが背振山系を中心に、ウラギンヒョウモン・クモガタヒョウモンが背振山系・天山山地・多良山地の丘陵地・低山地・山地の明るく開けた草原に分布するが個体数は最も少なく稀種であり、近年さらに少なくなっている。

8. ジャノメチョウ科

この科の蝶は、ヒメウラナミジャノメ・ウラナミ

ジャノメ・ジャノメチョウ・クロヒカゲ・ヤマキマグラヒカゲ・サトキマグラヒカゲ・ヒメジャノメ・コジャノメ・クロコノマチョウの9種が記録されている。

ヒメウラナミジャノメ・ウラナミジャノメ・クロヒカゲ・サトキマグラヒカゲ・ヒメジャノメ・コジャノメは県下各地の平地から山地に広く不変的に分布している。ヤマキマグラヒカゲは产地が局限され鳥栖市九千部山・脊振村背振山・三瀬村の金山と井出野の背振山系のみに記録され個体数も少なく稀種である。分布が分散的な種にジャノメチョウとクロコノマチョウがいるが、ジャノメチョウは県下各地の丘陵地から山地に広く分布するが県南西部などでは未記録であり、クロコノマチョウは県下各地の平地から低山地に広く分布しているが一部の市町村では未記録で十分な調査が必要である。

以上のように佐賀県に産する蝶は迷蝶や偶産蝶と考えられるものを除くと84種が記録され、地理的地形的条件を考えれば種類数の概要是ほぼ判明したと思われるが、佐賀県の蝶に関するこれからの調査研究は山積しており、

- ①平野部及び島嶼における分布の調査
 - ②種の未記録地域における十分な分布調査
 - ③記録が少なく稀な種の分布調査
 - ④市町村別分布表の作成
 - ⑤生態及び生活史の解明
 - ⑥自然環境保全に役立つ科学的研究
- など課題が多い。

ふるさとの活性化、村おこし運動、内需拡大という時の流れによって、各種の開発事業が実施され県民にとってよいことであるが、環境破壊による減少や絶滅した動植物の回復は困難といわれている。美名による環境破壊がなされないようにしたいものであり、またトンボ王国づくり、螢の里づくり、他地域からの動植物の移入や放虫などの事業ならびに採集規制などは安易な考えによらず、生態系を乱すおそれがあるものは専門家の意見を十分に聴き慎重に対処すべきであろう。そして衆知を集めて人間と生物が共存できる自然環境の保全を図り、緑が輝き、花が咲き、蝶やトンボが舞い鳥がさえずる明るく健康的な生活ができる“県民のふるさと”づくりを進みたいものである。

（平成元年8月5日、土曜教室第11回講座より）

（資料係長 宮崎 武夫）

行事のおしらせ

展覧会名	会期	観覧料	会場
一常設展（第四期）— 佐賀県の歴史と文化 〈1号〉自然史 〈2号〉考古・歴史 〈3号〉美術・工芸 *小さな展覧会 「春を描く近世絵画」	3月2日(金)～4月1日(日)		博物館
一常設展（第四期）— 近代の美術・工芸 〈1号A〉彫刻 古賀忠雄 〈1号B〉染色 鈴田照次 〈2号〉近代絵画 青木 繁・三根霞郷 〈3号〉近代絵画 岡田三郎助・黒田清輝ほか	2月16日(金)～4月8日(日) 〈3号〉は3月18日まで	大人200(150) 大・高生150(100) 中・小生 70(50) ()内は団体料金	美術館
美術館新収蔵品展（平成元年度）	3月21日(木)～4月8日(日)		美術館

小さな展覧会（博物館3号展示室）

「春を描く近世絵画」

桜の名所吉野山を描いた屏風など、桃山・江戸時代の屏風や掛軸など約20点を展示します。



観桜図屏風（六曲一双）部分

博物館・美術館報 第87号	発行	佐賀市城内1丁目15番23号
発行年月日 平成2年2月1日	佐賀県立博物館	佐賀県立美術館
編集出和人	刷印	同大印刷